



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 18 November 2003 (afternoon)

Mardi 18 novembre 2003 (après-midi)

Martes 18 de noviembre de 2003 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1(a)の詩と(b)の文章のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい。)

1(a)

ファンタスティック

わたしは小さな詩集を持つてゐる
そのなかに詩でつくつた花畑があり
そこを開くといつも
さまざまな花の匂がする
5 その花畑に ある晩
一人のお嬢さんが散歩しにきた
咲いた花を寝かすため
すっかりランプを消したとき
誰だかそそつかしく
10 月のランプまで消してしまつたので
お嬢さんはただくらい風の東のやうである
草むらの暗がりをはがり
ちつとしてゐた蛾は
そのくらい風のやうなものに流されてくる
15 かすかな光を見つけるとうれしそうに
翅をばたばたさせて飛んで行つた
夜明の光を凝らしたやうな石が
指輪にかがやいてゐたのである
お嬢さんは声に陰をあつめて
20 「まあいやなひと」と蛾にささやいた
わたしはいつ蛾になつたのかしら
お嬢さんの指のさきは火の匂がした

(堀辰雄、「ファンタスティック」、『少年詩編』より、『堀辰雄詩集』一九六六年)

(注) 堀辰雄(ほり・たつお)(一九〇四〜一九五三)詩人、小説家。東京生まれ。一九二九年、川端康成らと同人誌『文学』を創刊。一九三三年詩誌『四季』を創刊、広く抒情詩人たちの拠点となり、後進を育てる場ともなつた。中編小説として『風立ちぬ』『菜穂子』等がある。

1 (b)

いったい人は、どういうきっかけで本を読み出すようになるのだろう。(略)私の場合、それはふつうよりは、かなり早くはじまったように思われる。そして、私が他人より早く本を読み始めたとすれば、そのことはおそらく私が早く母を亡くしたということと、かなり深い関係がありそうである。

5 母が結核で亡くなったのは、今の教えかたでいえば、私が四つ半のときだった。結核とはいっても、母はそう長いあいだ寝ていたわけではない。床についたきりになったのが二月ごろで、六月の半ばには死んでしまったのだから、よほど進行が早かったのか、それまで気がつかずに無理をしていたのかのどちらかであったにちがいない。多分、その短い母の病中に、私は積木で文字を覚えた。表に片仮名で「ア」という文字が書いてあり、裏をかえすと「あ」という平仮名の文字が書いてある、四角い積木である。

10 母の病室にはいることは、固く禁じられていたが、それでも私は、ときどき女中や看護婦の目をかすめて母の枕元に座りこみ、

「これはなんていう字？」

15 と訊いたことがあつたような気がする。すると、母は、私がかざしている積木をみて、「ああそれ？ それは『ル』よ。カンガルーの『ル』だわ」

というふうに教えてくれた。そして、病人とは思えないほど明るい顔になって、雲間からさつと陽光がさしたように微笑んだ。死んだときに、まだ二十八にしかなくなつたのだから、母は当然若かつた。考えてみれば、現在の私より十歳も年下の、母はうら若い女だった。

20 霧のかなたに見える景色のように、記憶はきわめておぼろげな輪郭をとどめているにすぎないが、私はそうして、あと数ヶ月ののちに死をひかえた母から、片仮名と平仮名を教えてもらったのだつたような気がする。(略)

25 母が死んでから、ひとりっ子だった私は、しばしば積木で遊ぶようになった。文字のついている四角い積木だけではなく、いろいろなかたちの積木を私は持っていたが、それを組合せて好きな形をつくつて行くのである。(略)たしか私は、“軍艦”と“要塞”をつくるのが好きだったような気がする。正確に言えば、自分の眼に“軍艦”とか“要塞”だと思われるもののかたちを、丹念に積み上げて行くのである。(略)

30 だが、この作業が、ほとんど芸術作品をつくり上げるのと同じような、厳密で微妙な作業のように思われたのは、なぜだったろうか？ そして、それを完成したときのよろこびが、ほとんど作品を思い通りに仕上げたときの満足感に匹敵するようだったのは、どういうわけだろうか？ おそらくこの積木の遊びは、私にとっては自分でもそれと気がついていない、懸命な自己表現の試みだったにちがいない。私はひと通り文字を覚えていたが、まだ文字で自分を表現することを知らなかつた。しかも、私が表現しなけれ

35

ばならないことは、あまりにも多すぎた。したがって、私は文字の書いてある積木と、
 そうでない積木の両方をつかつて、一生懸命自分を表現しようとしていたのだろうと思
 われる。”軍艦”も”要塞”も、だから実は”軍艦”でも”要塞”でもなかった。それ
 は私そのものであった。あるいは私の悲しみや憧れ、または怒りそのものであった。(略)

40

文字による自己表現が私に可能になったのは、ずっとあとになってからである。しか
 し読書の習慣は、積木遊びに飽きたころからすぐにはじまった。つまり、それは、私の
 なかに、母の死による欠落の自覚が定着するのとほぼ時を同じくしてはじまった。最初
 に書いた通り、私はその時期がやや異常に早かったことを認めなければならない。だが、
 だからといって、私の体験が特別なものであったとは、決していえないように思われる。
 人はだれでも、男女の別なく、多くは青春のころに、なんらかの根源的な欠落の自覚に
 達し、それぞれの積木を積もうとしはじめるものだからである。そして、それと同時に
 読書の習慣がはじまる。あたかも言葉をもつて自分に内在する欠落を埋めようとするか
 のように。あるいは、表現しようとする自分の悲しみや憧れ、怒りを、他人の表現した
 もののなかに探し求めようとするかのように。

45

50

読むことを覚えるということは、社会が教育を通してその成員に強制する行為である。
 しかし、読書に没頭するという行為のなかには、これよりももう少し深い意味が隠され
 ている。つまりそれは、なにがしかの危機の自覚から生れ、それを乗り越えようとする、
 自分にも充分には意識されていない意欲に結びついた行為である。したがってそれは、
 決して受け身ではあり得ない。むしろ能動的で積極的な精神の営みであり、生きる意志
 の反映だとさえいえるのである。

(江藤淳、「読書について」『夜の紅茶』第四部、一九七二年)

(注) 江藤淳 (えとう・じゅん) (一九三三〜一九九九) 評論家。東京生まれ。慶應大学在学中に
 書いた『夏目漱石』が新鮮な漱石論として好評を博した。政治・社会・文化全般に関する評
 論へ活動を広げ、コモン・センス、ナショナリズム、現実主義による論調で知られる、現代
 日本の代表的評論家。